

「ネパール、ポカラの国際山岳博物館と私のヒマラヤ登山」  
—JICA シニアボランティア活動とその後のネパール三昧—

日本山岳会海外委員、東京都山岳連盟海外委員  
竹花 晃

1. はじめに

JICA の海外シニアボランティア (SV) として、ネパールのポカラにある国際山岳博物館の運営の任務で派遣された。期間は 2004 年 4 月～2006 年 4 月の 2 年間である。

元々登山が好きで、若い頃は所属山岳会で例に漏れずヒマラヤを目指したこともあったが、機会を逃したまま会社員生活を送っていた。定年近くになり、JICA のネパールの山に関する SV の指導科目に合格したため早期定年退職し、今までとは一変した経験をするようになった。全く異なった分野の人達との人脈が広がり、ネパールでの生活や国際山岳博物館 (IMM) での任務を通してネパールやヒマラヤを多少なりとも理解した。そして帰国後もほぼ毎年ネパールに通い、ヒマラヤを楽しんでいる。

ここでは日本とも係わりの深い IMM 及び、IMM での活動をまず説明し、次に帰国後のネパールのヒマラヤ登山やトレッキングを紹介する。併せてネパール・ヒマラヤの新規解禁峰及び登山料金改定と、2014 年 10 月のアンナプルナ山域における暴風雪及び雪崩による遭難についても触れたい。

2. ポカラの国際山岳博物館

(1) IMM の歴史

国際山岳博物館の設立は、ネパール山岳協会 (Nepal Mountaineering Association; NMA) の長年の夢であった。

設立の経過は次の通りである。ポカラの現有敷地は、1985 年 4 月に購入され、資金面等での遅れから、1996 年 5 月に建設が開始された。そしてソフトオープニングは 2002 年 5 月 29 日、正式オープンは 2004 年 2 月 5 日であった。日本からの資金面での支援は大きく、正式オープニングも多数の日本人が参加した。



(2) IMM の概要

- ・敷地面積：51,000 m<sup>2</sup>、建築面積：3,110 m<sup>2</sup>、延べ床面積：4,250 m<sup>2</sup>
- ・展示：山岳民族、自然史、登山の三部門と、外部団体 (IUCN, ICIMOD, WWF 等) 寄贈による国外からの展示品も多い
- ・設備：チベット仏教仏間、図書室、AV ルーム、会議室
- ・付属施設：レストラン、土産物店、等

### (3) 日本からの IMM 建設支援金

日本山岳会：13,171,241 円、HAT-J：1,256,200 円、日山協・労山・日ネ協会等：10,614,444 円  
利息等を含む収入総額：25,048,316 円、管理費：△535,197 円  
合計送金額（関係 6 団体）：24,513,119 円、その他団体、個人の寄付推定 5,000,000 円以上  
日本の推定合計支援額：約 30,000,000 円 円/ドル為替レート 120 円とすると、約 USD 250,000

※NMA からの日本への初めての支援依頼は 1983 年 5 月。結局、日本からの支援が圧倒的に多かった。

### (4) ネパール観光省及び海外からの建設支援金

ネパール観光省：USD 41,071、中国登山協会：USD 5,000、インド登山協会：USD 5,080  
韓国登山協会：USD 10,000、アジア山岳連盟：USD 1,000、その他寄付：USD 48,920  
諸外国計：約 USD 70,000

### (5) 主な寄贈者（敬称略）

今西壽雄（奥様）：マナスル、田部井順子：エベレスト女性初登頂、野口健：エベレスト清掃隊  
高山龍三：河口慧海関連書籍、大森弘一郎：山岳写真、カトマンズクラブハウス：書籍  
王立地理学会：エベレスト遠征写真、フランス：アンナプルナ、オーストリア：山地民俗写真  
ジョージ・バンド：カンチェンジンガ、トニー・ハーゲン遺品（娘さん）、スロベニア

### (6) JICA による支援

JICA より 4 代に渡りシニア海外ボランティアを派遣。オープニング準備から、その後の展示や運営の充実に努めた。

初代：AD 氏	2002 年 4 月～2004 年 4 月
2 代目：竹花	2004 年 4 月～2006 年 4 月
3 代目：F 氏	2008 年 6 月～2010 年 6 月
4 代目：AK 氏	2010 年 6 月～2012 年 6 月、短期：2013 年 8 月～2014 年 5 月

2004 年のグランド・オープニングの前に、IMM のマネジャーのナビン・ギミレ氏を JICA の支援により派遣。大町山岳博物館や立山カルデラ砂防博物館などで研修を受けた。

## 3. IMM での活動

### (1) 活動概要

#### ○任務：国際山岳博物館の運営

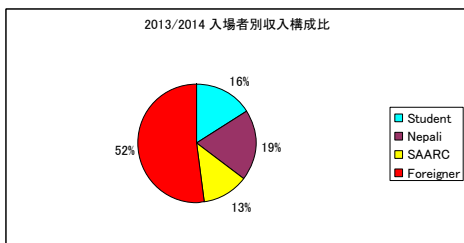
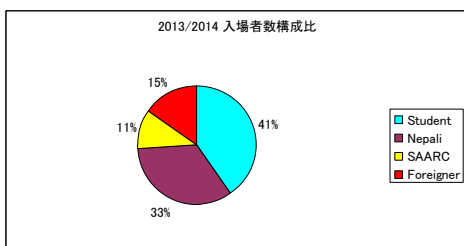
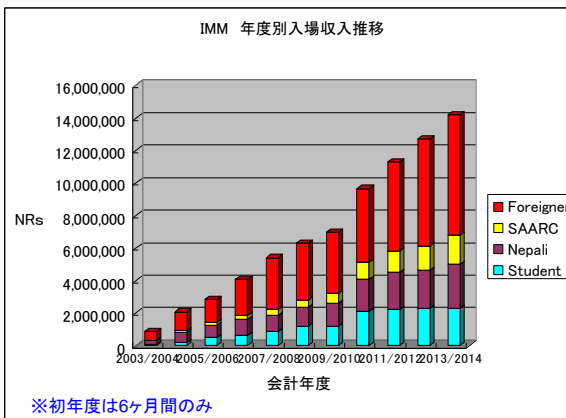
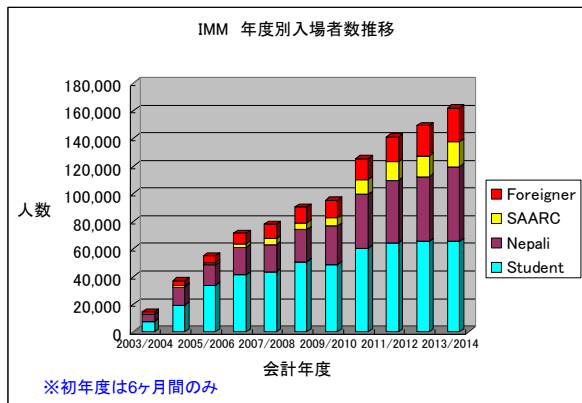
IMM は NMA の事業の一部門であるため、NMA との係わりが非常に大きく、重要な意思決定や財務管理は NMA でなされる。従って、重要事項の計画・予算は NMA との折衝が必須であった。

#### ○内容：事業計画の立案と実施、マーケティング（特に認知度アップのための広告、パブリシティ）

展示品の収集・展示ケース設計・作成・取付、人材育成（マネジャー、スタッフ）、図書の管理と充実（収集、購入、リスト化）、土産品売店の活性化、スタッフの規律、環境美化運動、etc.

<活動の詳細についてはパワーポイントにて紹介>

(2) IMM の入場者及び入場者収入



<入場料>

学生:NRs30  
 Nepali:NRs50  
 SAARC:NRs100  
 外国人:NRs300

<注>

2014年7月中旬より、それぞれNRs40,80,200,400に値上げ。  
 SAARCは南アジア連合国、外国人はSAARC以外の国。

(注) ネパール暦 (ヴィクラム暦) の新年は、西暦の 4 月中旬から始まる。ネパールの会計年度は 4 ヶ月目、即ち西暦では 7 月中旬から始まる。直近で終了した会計年度は、2013 年 7/中～2014 年 7/中。31 回雲南懇話会の 12 月 20 日はネパール暦では、2070 年 Mansir。

4. 河口慧海のネパールでの足跡

IMM には河口慧海の展示コーナーがあり、また寄贈による慧海の書籍も充実している。カトマンズやムスタンには慧海のゆかりの場所が多くある。

- ・カトマンズのボダナートの河口慧海顕彰碑
- ・チベット旅行記のポカラの記述；「山中の花の都」
- ・トゥクチェで慧海が滞在した、ハルカ・マン (現ニルジャール) 宅、アップルブランデー工場
- ・マルファで慧海が滞在した、アダム・ナリン (現在、孫のスバルナ・クマール・ラルチャン、マウン・ヴィラ・ホテル経営) の河口慧海記念館
- ・ムスタン・エコ博物館：ジョムソン、河口慧海の展示がある



## 5. ポカラのグルカ博物館

グルカ兵にはマガール、グルン、ライ、リンブーなどの各民族が多い。ポカラにはグルン族の元グルカ兵の豪邸がよく見られる。なお、グルカという民族はない。勇猛果敢で知られるグルカ兵のモットーは、“It is better to die than to be a coward.”

グルカ兵は英国軍の傭兵として、第二次世界大戦で日本軍とも戦った。



## 6. ネパールから帰国以後の主な海外山行とトレッキング

- 2006年8月 アルプス登山；ブライトホルン、メンヒ、ポルックス（予定していたアイガー、マッターホルンは大量降雪で登山不可）
- 2006年11月 アンナプルナ トロン・ピーク登山～ティリチョ・レイク
- 12月 エベレスト BC、カラパタール～チョラパス～ゴーキョ・ピーク
- 2007年9～10月 プモリ登山（JAC）、トロンパス（2人）
- 2008年11～12月 アイランド・ピーク登山、ランタン（ツェルゴリ、ゴサインクンド）
- 2010年8月 バルトロ氷河 K2BC（ツアー参加）
- 2011年10月 シングーチュリ転じてテント・ピーク登山（JAC）
- 2012年10～11月 チュールーウェスト登山、テリチョ・レイク～メソカント・ラ
- 2013年10～11月 トゥクチェ・ピーク登山（2人）、レンジョ・パス～ゴーキョ P～チョラパス
- 2014年8月 新疆 チョゴリ BC（ツアー）

※表記のないものは単独山行

☆国内山行は、冬山や5月を中心として、八ヶ岳の中山尾根などの岩稜や穂高コブ尾根、白馬主稜、剣岳源次郎尾根、上越の雪稜など。沢や山スキーもやる普通の山屋です。

## 7. ヒマラヤの登山関係における最近の傾向

### (1) 地球温暖化の影響

- ①氷河、雪線の後退
- ②土砂崩れや落石で地形の変化
- ③クレバスの増加

5000～6000m付近はクリティカルな気温の高度のため、影響が一番大きい。以前は比較的容易に行けたルートが不可能または難しくなっている。

### (2) モンスーンの不安定化

これも地球温暖化の影響かもしれない。モンスーン時期に雨が少なかったり、10月になっても、大雪、大雨が続くことが多くなった（ような気がする）。2014年10月にベンガル湾からのサイクロンが襲い、ネパールの中西部は大雪となり、吹雪、雪崩で多くの人が亡くなった。⇒後述

10～12月は一般に好天が続き、トレッキングや6～7000m級の登山適期であるが、過去にも大規模な遭難があった。⇒後述

(3) ネパール アンナプルナエリアを中心とした、大雪・雪崩遭難 (2014年10月)

- ・原因：ベンガル湾からインド亜大陸を襲い、ネパールの中西部に向かったサイクロン Hudhud が大雪や、吹雪や雪崩を引き起こした。
- ・経過：10月12日までの好天が急激に悪化。14日：トロンパスでは暴風雪、雪崩で多数の犠牲者。Phu (プー) でも雪崩で4人死亡。ダウラギリのBCでも大規模な雪崩発生。  
16日：外国人76人を含む154人救助。  
17日：ティチョレイクやラルキャ・ラ (5160m、マナスルー周にある峠) でも多数が救助待ち。  
18日：トロンパスで日本人2人の遺体を確認される。トロンパスでは17人以上亡くなった。  
死者は最終的に43人と言われる。  
※救助や遺体の収容にはネパール軍が大きく貢献した。
- ・問題点：天気予報などの情報伝達システムの不備。トレッカーの装備や知識不足。ガイドレス。
- ・対策：トレッキングルートに情報センターと避難シェルターの設置を予定。

(4) 過去のポストモンスーンの大雪による大量遭難

- ①1995年11月：ゴークョ・ピークのやや南に位置するパンガ (カ) でキャンプ中に雪崩が襲い、日本人13人とガイド・ポーター11人、現地住民2人の、計26人死亡。大雪と雪崩で、エベレスト周辺で42名が亡くなった。土砂崩れ等を加えると60人以上死亡。
- ②2005年10月20日 マナンの東方のプーの北にあるカンダール(6981m)に向かったフランス隊のキャンプ場に雪崩が襲い、フランス人7人、ネパール人11人の、計18人が死亡。4人のネパール人はテントの外にいて無事だった。

8. ネパール・ヒマラヤにおける新規解禁峰と登山料金改定

(1) オープンピーク (2014年5月21日より)

- ①従来のオープンピーク：326座から16座除外 (異名での重複や低い標高など)
- ②新規オープンピーク：104座
- ③合計オープンピーク：414座

(2) トレッキング・ピーク (新規名称)

5800m未満のピーク：登山許可や登山料金不要。トレッキング中に自由に登ることができる。

(3) 新規登山料金 (2015年1月1日より施行)

外国人1人当たり料金

単位：USD

	ピーク	春	秋	冬/夏
1	エベレスト (一般ルート)	11,000	5,500	2,750
2	エベレスト (その他ルート)	10,000	5,000	2,500
3	その他の8000m峰	1,800	900	450
4	7501m~7999m	600	300	150
5	7000m~7500m	500	250	125
6	6501m~6999m	400	200	100
7	アマダブラム(6812m)	400	400	200
8	6500m未満	250	125	70



#### (4) NMA ピークについて

○通称トレッキングピークと呼ばれることが多いが、正確には NMA が指定したクライミング・ピーク（18 座）とエクスペディション・ピーク（15 座）の計 33 座のことである。新しく制定された、トレッキングピークとは全く異なる。5800m 未満の山は新しいトレッキングピークに移行された。

○NMA に申請し、登山料やゴミ処理供託金を払う。

○NMA ピークは易しい山と誤解されているが、クスムカングルーやシンガーチュリのように簡単には登れない山も多い。

#### 参考文献

##### 2. 国際山岳博物館

竹花晃「国際山岳博物館報告」、「ヒマラヤ」No.438（日本ヒマラヤ協会 2008 年 5 月号）P1~12

Aklir Takehana, “Activities in the International Mountain Museum, Pokhara, Nepal”, “Japanese Alpine News Vol.10, 2009, The Japanese Alpine Club, P1~6

「PEOPLE Nabin Ghimire」、「ヒマラヤ」No.385（日本ヒマラヤ協会 2003 年 12 月号）、P22

“International Mountain Museum Pokhara” 2004 年, Presented by Bhumi Lal Lama, Nepal Mountaineering Association

##### 4. 河口慧海

河口慧海、高山龍三校訂「チベット旅行記(一)」講談社学術文庫、1978 年、P65~75、P93~99

河口慧海、奥山直司 編「河口慧海日記」講談社学術文庫、2007 年、P23~35、P158~174

奥山直司著「評伝 河口慧海」中央公論新社、2003 年、P154~159

根深誠著「遙かなるチベット 河口慧海の足跡を追って」山と溪谷社、1994 年、P48~69、P104~112

##### 5. グルカ博物館

Wikipedia 「グルカ兵」<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%AB%E3%82%AB%E5%85%B5>

##### 6. ヒマラヤの変化、大雪・雪崩による大量遭難

梅棹忠男+山本紀夫 編「山の世界」2004 年、第 2 章「水資源としての山」中尾正義、第 4 章『山岳観光開発と温暖化』渡辺梯二

酒井治孝 編著「ヒマラヤの自然史」1997 年、第 3 章「ヒマラヤの氷河の成長と変動」門田勤

ブログ「けえがるね?日記」「嵐のあと・・・Nepali Times 記事抄訳」<http://japanepal.com/index.html>

“Surprise Blizzard, Avalanches Kill Hikers in Himalayan Mountains” National Geographic, Oct.15, 2014

<http://news.nationalgeographic.com/news/2014/10/141015-himalaya-nepal-avalanche-blizzard-deaths-annapurna/>

“After the storm” Nepali Times, Oct.17, 2014

<http://nepalitimes.com/page/annapurnas-avalanche-and-blizzard-early-weather-warning-systems>

“Recriminations Follow Deaths of Hikers in Nepal” The New York Times, Oct.17, 2014

<http://www.nytimes.com/2014/10/18/world/asia/nepal-to-establish-weather-warning-system-after-hiking-disaster.html>

“Himalayan storm disaster claims seven more victims” Observer Oct.18, 2014

<http://www.theguardian.com/world/2014/oct/18/himalayan-storm-claims-seven-more-victims>

“Death toll in Nepal’s worst trekking disaster reaches 43” Yahoo News, October 21, 2014

<http://news.yahoo.com/death-toll-nepals-worst-trekking-disaster-reaches-43-160707234.html>

“A huge avalanche struck the overnight camp....” The Associated Press,Nov.1995

<http://www.avalanche-center.org/Incidents/1995-96/19951111-Nepal.txt>

##### 7. ネパール・ヒマラヤの新規解禁峰と登山料金改定

竹花晃「ネパール・ヒマラヤの新規解禁峰と登山料金改定」、「山」2014 年 6 月号 No.829、日本山岳会

Press Release “Royalty for Foreign Climber per Person in Dollar” Ministry of Culture Tourism an Civil Aviation, 12<sup>th</sup> Feb